

令和 4 年 5 月 15 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K11841

研究課題名(和文) アートツーリズムのエスノグラフィー：地方国際芸術祭の深化と拡充の理論化に向けて

研究課題名(英文) Ethnography of Art Tourism: Toward a Theoretical Discussion of Deepening and Expanding Local Art Festivals

研究代表者

山田 香織 (Yamada, Kaori)

東洋大学・社会学部・講師

研究者番号：50731832

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、2010年頃から地方創生を意図して国内各地の中山間地域や離島地域といったいわゆるへき地において実施されるようになった地域国際芸術祭を、ツーリズム現象として捉え返し、アートツーリズムの実態を明らかにすること、この実践の深化拡充の可能性を検討することを目的とした。民族誌的フィールドワークをおこなったことで、地域国際芸術祭が内包するツーリズム的側面、会場となる個々の地域に生起する観光的なものとその多様性を把握することができ、アートツーリズムの理論化に向けた議論の端緒をつかむに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アートツーリズムの実践が立ち現れる現場とその周辺の実情を捉え、事例を手がかりにアートツーリズムの理論化にむけた糸口を見出した点に本研究の学術的意義がある。また、研究成果のなかでも、アートツーリズムが実践される場で生起する事象を言語化し、社会に還元することは、われわれにツーリズムの担い手/鑑賞者・体験者としてどう立ち振る舞うべきであるのかを考える機会を提供しうる。この点に本研究の社会的意義を見出すことができる。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study comprises three elements. First, to understand regional art festivals (Triennale) held in isolated, depopulated, and aging regions in Japan as a tourism phenomenon. Second, to clarify the actual situation of art tourism based on case studies. Third, to examine the possibility of deepening and expanding art tourism.

In this study, ethnographic fieldwork was conducted in the Setouchi area. Consequently, we were able to grasp the touristic aspect of the regional art festivals and the diversity of the touristic aspects that occurred in each region where the festivals were held. The data analysis provided the first step to discuss the theoretical aspects of art tourism.

研究分野：観光人類学

キーワード：アートツーリズム 経験 観光的なもの アートプロジェクト 地域国際芸術祭 日本 ツーリズム
・リテラシー

1. 研究開始当初の背景

21世紀に入り日本国内では、アートフェスティバル（トリエンナーレ、ビエンナーレ）がさかんに開催されている。なかでも少子高齢化や人口減少の著しい地域—たとえば中山間地域や離島地域—において、アーティストが地域住民との対話を通じて地域性を掬い上げ表現したサイトスペシフィックアートを多数展示する芸術祭（以下「地域国際芸術祭」と称す）の開催は盛んで、2010年頃以降その数は増加している。「アート×地方創生」というこれまであまり関連性がないと思われていた要素の組み合わせとその成果は、地域国際芸術祭についてはアートプロジェクトの現場関係者はもとより、多分野の研究者にも熱いまなざしを注がせている。

ところで、そうした地域国際芸術祭に対する各方面からの熱いまなざしは、芸術祭の現場そのものの、また、それに直接関与する人びとに焦点化されている。これまでが地域国際芸術祭の勃興期であったことを勘案すると当然ともいえる。しかしながら、開催回数を重ねつつある今日（本研究開始当初）、芸術祭にかかわる実践は、その現場とそれに直接関与する人びとに限定されるのではなく、ツーリズムのひとつとして広がりを見せはじめている。

2. 研究の目的

こうした状況をふまえると、アートツーリズムと観光まちづくりの視角を携え、今まさに現場で起きている、当該地域を巻き込みながら広がりとし、深みを見せつつある地域国際芸術祭をツーリズム現象としての的確に捉えなおして見る必要があるのではないだろうか。さらに「アートツーリズム」に関していえば、この術語はすでに存在し、地域国際芸術祭はその中核的対象として定置されてきたものの、これをツーリズムの枠組みで丁寧に捉え、具体的に議論した論考は管見の限り極めて少ない。

以上の現状（研究開始当初）と問題意識の下、本研究では、地域国際芸術祭をツーリズム現象として捉えることに挑戦し、そのうえでアートツーリズムの実態を明らかにし、この実践の深化拡充の可能性を検討することを目指すこととした。

3. 研究の方法

民族誌的手法を用いることで、地域国際芸術祭の実施が契機となり、当該地域で広がりを見せるアートと芸術祭にかかわるツーリズム事象を総体的にとらえることとした。研究遂行にあたっては、研究代表者がこれまで研究対象として注目してきた瀬戸内国際芸術祭、調査拠点としてきた香川県西部地域をフィールドとし、地域国際芸術祭の会場となる地域とその周辺地域において、芸術祭の会期中とそれ以外の時期のアートのものを介した人びとの交わり、ツーリズムをめぐる動きや生活実践、観光まちづくりにかかわる実践についてデータ収集（聞き取り、参与観察）をおこない、それを分析する手法をとった。

4. 研究成果

ここでは、本研究で得られたデータを提示し、そのうえで研究成果を整理する。本研究においては、3つに大別できる動きを捉えた。そのなかのひとつが、地域国際芸術祭の動向である。本研究では、瀬戸内国際芸術祭とその現場をツーリズム現象が生起するところとして注目

をしてきたが、研究期間中の 2019 年には第 4 回瀬戸内国際芸術祭が開催された。過去 3 回の芸術祭との比較では、公式ツアーや、フェリー利用をスムーズすることを意図した乗船パスポートが販売された。ツアー実施にあたっては、ツアーガイドも養成された。また、以前からコアコンテンツの一つとして重視されていた食の提供については、各会場（離島）の食をめぐる習俗や文化、これに関わる組織や団体の経験やネットワークを生かして充実化が図られた。アジア圏を中心とした国外からの来訪者やボランティアがこれまでにない数となった点も特徴といえる。こうした新たな動きは、観光事業としての充実化と特徴づけることができるだろう。

つぎに、本研究においては複数地域の動向に着目したことで、上記の包括的な新たな動きの下で立ち現れた各地の地域国際芸術祭の様相を捉えることもできた。たとえば、現在はほとんどの住民が年金生活者で、かつて観光地化の動きのあった A 島では、地域国際芸術祭の開催に加えて、行政独自のアートプロジェクト事業が芸術祭開催年以外の年も含め毎年実施されている。コロナ禍前は、数名のアーティストが毎年、島内のアーティスト・イン・レジデンスで制作活動をおこない、芸術祭では A 島でアート作品を発表していた。彼らの作品制作に積極的に関与する住民もいた。会期中、作品管理や運営は、行政関係者や島外の市民によって担われていたが、彼らの作品に限っては島の住民が管理し、来訪者対応もおこなっていた。一方、漁業が盛んで夏にその最盛期を迎える B 島では、運営全般は行政や NPO 団体の主導ですすめられていて、開催年以外のアート関連イベントも、年に数回、行政や NPO 団体主催で実施される程度である。

来訪者からは、このふたつの島は、芸術祭の複数ある会場のなかのひとつずつとして同質的にとらえられるかもしれない。しかし、会期外にまで視点を広げ、また、会期中の芸術祭の担い手にも着目し、そこで展開されているアート実践の様相をみていくと、双方には相違があることが浮き彫りとなってくる。両島において芸術祭は 3 年に一度やってくるハレの機会といてよい。しかし A 島においては、全体に共通する芸術祭の仕組みのなかに住民のニーズに応じて定着化しつつあるアート実践が存在し、それが芸術祭の運営や観光事業化と共生するに至っている。A 島のアートをめぐる実践は複層化の動きを見せており、それは会期以外の時期においても継続していて、そこにはささやかではあるものの芸術祭とは別の、地域の人に紐づいた身の丈にあったアートツーリズムの展開もみられる。一方、B 島の方は運営組織のイニシアティブの下、芸術祭の共通枠組みのなかでアートツーリズムが展開されている。

この二島の様相とその比較から研究代表者は、アートを媒介としてみる／みせる場もしくは体験する場を創出するアートツーリズムの拡充深化の可能性は、普遍性と特殊性が融合するところにあるのではないかと考えた。ここでいう特殊性は、サイトスペシフィックアートという作品の特殊性だけでなく、各島の歴史や文化といったものをも織り込んだ、人と作品のかかわり方も想定している。

最後 3 つ目として、地域国際芸術祭とは直接関係がない地域 C の事例を捉えることができた。地域 C はインスタ映えスポットとしてマスコミにも取り上げられ、数年前から観光スポット化した場所である。若い起業家が多く活躍していて、移住者も増加傾向にあるエリアである。こうした動きのあるこの場所の海岸エリアで、第 4 回瀬戸内国際芸術祭の翌年の 2020 年に、「芸術祭」と冠したイベントが開催された。運営母体は、地域の 30 代 40 代の事業者を中心とした実行委員会と、海岸エリアの指定管理者の中核をになう企業だった。地域国際芸術祭同様、ディレクターとプロデューサーを擁したこの「芸術祭」では、アート作品の展示、体験イベント、トークイベント、有名アーティストによるコンサートなどが企画され、地元飲食店の出店も並んだ。なかでも、一流ミュージシャンによるコンサートは目玉イベントといえるもの

で、県外からも熱烈なファンが足を運んでいたようである。しかしこの「芸術祭」は、内容やしぐみなどの点において、近年各地で開催される地域国際芸術祭と様相と異にしている部分が少なくなかった。

この事例で注目したいのは、市民による文化芸術とのかかわり方、表現することについてである。地域国際芸術祭はほぼ例外なく地方公共団体が関与（もしくは主導）しているわけだが、この「芸術祭」に関しては有志の市民と当該エリアに関係する民間企業、そして彼らのネットワークと人脈によって実現された。これに類似した事例としては瀬戸内国際芸術祭開催年に香川県南部エリアで開催される山なみ芸術祭や、大分県別府市で例年開催されるベップ・アート・マンスが想起される。

以上の事例を手がかりにすると、アートツーリズムの深化拡充を考えるにあたっては、一方で、その普遍性と特殊性を備えたビジネスとして成長、もう一方では、その流れを鵜呑みにしないような批判的視点と表現する術をもった個々人（住民、ボランティア、来訪者など）の存在が不可欠であると仮定できるのではないだろうか。後者については、D. マキャーネルが *The Ethics of Sightseeing* で指摘した観光の倫理と関連する領域であり、社会構築について検討することでもある。本研究の成果は、以上示した事例などを通じて、地域国際芸術祭を一例としたアートツーリズムの理論化に向けたこうした議論の端緒をつかんだところにある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山田香織	4. 巻 59 (1)
2. 論文標題 外部から持ち込まれた「祭り」の画一性と地域性－瀬戸内国際芸術祭に関する事例研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東洋大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 33-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山田香織	4. 巻 8 (1)
2. 論文標題 (書評) 記憶を可視化する景観創造としてのアートプロジェクト	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 観光学評論	6. 最初と最後の頁 103-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山田香織
2. 発表標題 分科会「地域アートプロジェクトをめぐる経験 「アートのなるもの」と「観光的なるもの」との連関の探究にむけて」趣旨説明
3. 学会等名 観光学術学会第10回研究大会テーマセッション (オンライン開催)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田香織
2. 発表標題 地域アートプロジェクトにかかわる住民はホストなのか 西讃地域の離島における瀬戸内国際芸術祭の事例
3. 学会等名 観光学術学会第10回研究大会テーマセッション (オンライン開催)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田香織
2. 発表標題 地方国際芸術祭は誰の / 何のためのものなのか
3. 学会等名 地域活性学会第12回研究大会（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山田香織
2. 発表標題 地域連携による教育実践と人材育成
3. 学会等名 地域活性学会第10回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山田香織
2. 発表標題 地域文化観光の創造に関わる「地域の人々」とは誰なのか？
3. 学会等名 観光学術学会第8回研究大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 橋本和也編著（山田香織 第7章分担）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 202
3. 書名 人をつなぐ観光戦略 ひとづくり・地域づくりの理論と実践	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------